

ホルマリン固定組織標本の凍結切片作製法の検討と意義

大森 康旨, 小野 久子, 守安 岳征, 西村 知己, 雑賀 興慶 (大津赤十字病院病理部)

一般に日常の病理検査ではホルマリン固定組織標本が使用されている。H染色・特殊染色を始め、最近では免疫染色でさえ、ホルマリン固定 - パラフィン包埋処理された組織で実施されている (F・P法)。しかしなお、脂肪染色はF・P法では不可能で、これまではホルマリン固定組織標本を (1)ガムシユクロ - スで約一晚浸透 (4) (2)電子レンジと圧力釜を用いるなどの方法が報告されてきた。その基本的な考え方は、いずれも組織からホルマリン固定液を除去し、包埋剤を組織に均等に浸透させることである。今回、私達はそのような考え方に基づき、ホルマリン固定組織を前処理することなく直接包埋剤に入れ、陰圧・陽圧を反復繰り返す操作を行ったところ、ホルマリン固定組織からの凍結切片作製を可能にすることが出来たので報告する。

【材料と方法】組織：手術または剖検された肝臓、腎臓、膵臓、腫瘍を試験材料として用いた。(サイズは1cm大、厚さは2~3mm程度)。器具：注射シリンジ (30ml)、クリオスタット (ライカCM1900)。包埋剤：OCT

コンパウンド (50%に希釈)。処理法：30mlの注射シリンジ内にホルマリン固定組織と50% OCTコンパウンド5mlを一緒に入れる。約10分間 (およそ10回)、注射シリンジ内で組織に陰圧・陽圧を加える。薄切：クリオスタット内、-25℃の状態ですべて薄切する。染色：H染色、ズダン染色。

【結果】この方法では、通常のパラフィン包埋後の切片と殆ど変わらない比較的美しく保たれた組織構築が得られ、またH染色と脂肪染色についても極めて良好な結果が得られた。

【考察】本法は迅速な脂肪染色に応用でき、更に手術固定標本の早い結果が要求される時、殊に手術時 (誤って)ホルマリン固定された後に迅速標本を要求された場合などに応用可能である。現在免疫染色への応用の有用性についても検討中である。

大津赤十字病院・病理部 077-522-4131